

マルコによる福音書 1章 40-45 節

2014年8月28日

古本 靖久

- 1、聖歌 528番 「主のみ手はかつて 人を癒し」
- 2、お祈り
- 3、テキストの位置

今回の箇所は、1章の最後の部分です。これまでマルコ福音書には個人のいやしの記事が二度（汚れた霊に取りつかれた男、ペトロのしゅうとめ）出てきました。

ここには三番目の人が出てきますが、これまでのいやしの記事とは違い、いやされる人の信仰にも焦点があてられています。

序文	1:1-15	
ガリラヤでの活動	1:16-20	四人の漁師の召命
	1:21-28	権威ある新しい教え
	1:29-31	ペトロのしゅうとめのいやし
	1:32-34	夕暮れのいやし
	1:35-39	宣べ伝えるために
	1:40-45	ツァーラアトの人の信仰

- 4、1節ごとに

◆ツァーラアトの人の信仰

1:40 さて、重い皮膚病（ツァーラアト）を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心（あなたが望む）ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。

「ツァーラアト」と訳した言葉については次ページ以降で見っていきます。

この病気は当時、治療が極めて困難で、ラビ（ユダヤ教の教師）たちは「生きながら死せる者」とみなしていたようです。律法の上で汚れた者とされ、イスラエルの宿営には住めず、誰かが近づいてきたら「わたしは汚れた者です」と大声で叫ばなければなりません。彼らはとても孤独を感じ、仲間たちで共同生活をしていました。

そんな彼がイエス様の元に来ることは律法に違反することでした。しかし、彼は「あなたが望むならば」とイエス様の力を信頼し、すべてのことはイエス様の意志にかかっていることを謙虚に言い表します。ここに彼の信仰が示されています。

「み心」を求めることは古代の祈りの定式にあり、神さまの主権的な意志を認知した告白ともいえます。イエス様のゲツセマネでの祈りにも、その定式は見ることができます。

新共同訳聖書の「重い皮膚病」について

「重い皮膚病」と訳されている言葉は、前に使っていた口語訳聖書では「らい病」と訳されてきました。旧約聖書では「ツァーラアト」（ヘブライ語）、新約聖書では「レプラ」（ギリシア語）が用いられていますが、これらが皮膚の病を含んでいることから、ハンセン病と理解され、「らい病」と訳されてきました。しかし今日、「ツァーラアト」と「レプラ」は、何の病であるか特定できていません。

ハンセン病の発症例が、歴史的に確認されているのは、紀元前七世紀頃のインドと中国です。それがヨーロッパに広がったのは、アレキサンダー大王の遠征後のことで、紀元前三世紀頃と考えられています。ということは、旧約聖書に記されている「ツァーラアト」とハンセン病との関係は明確ではないということです。実際、レビ記に描かれている「ツァーラアト」は、皮膚の病ばかりではなく、ある種のカビと考えられるようなものも含まれており、明らかにハンセン病の症状とは異なります。歴史的にも医学的にも、何の病であるか分からないものを、特定の病気（ハンセン病）と結びつけることは誤りです。

一方、新約聖書の「レプラ」は、旧約聖書の「ツァーラアト」に対応する言葉です。旧約聖書のギリシア語訳である「七十人訳聖書」では、「ツァーラアト」の訳語に「レプラ」を用いたからです。しかし実際には、「レプラ」は乾癬（かんせん）や腫瘍（しゅよう）など、種々の皮膚病の総称のような言葉であって、「ツァーラアト」の内容を正確に反映しているとは言えません。例えば、ルカによる福音書4章27節には、旧約聖書のナアマンなど、エリシャの時代に「レプラ」があったと記されています。しかし、旧約聖書の時代の「ツァーラアト」が何の病か特定できない以上、この「レプラ」をハンセン病と言うことはできません。また、新約聖書には、「レプラ」の症状は全く記されていません。つまり、この病に関する情報としては、旧約聖書以上の事柄を知ることができないのです。このことも、新約聖書の「レプラ」を、ハンセン病と特定できない理由の一つです。

新約聖書の時代、今日のハンセン病は、「エレファンティアシス（象皮病）」と呼ばれていたことが明らかになっています。それが「レプラ」と言われるようになったのは、中世と言われていました。ハンセン病は、「レプラ菌」による感染症なのですが、この「レプラ菌」という呼称は学術的に確定しているものの、新約聖書の「レプラ」という呼称とは歴史的に隔たっています。

こうしたことから、聖書で「らい病」と訳されてきた「ツァーラアト」、「レプラ」は、何の病であるか特定されておらず、したがって今日のハンセン病だと言うことはできません。

そのため、日本聖書協会「新共同訳聖書」では、旧約聖書の「ツァーラアト」を「重い皮膚病」「かび」、新約聖書の「レプラ」を「重い皮膚病」と訳出しました。またこれは、暫定的な措置であると発表されました。

また、新改訳聖書刊行会「新改訳聖書」改訂第三版は、「らい病」と訳されてきた言葉を、「ツァーラアト」、「ツァーラアトの者・人」、「ツァーラアトに冒された（者・人）」と訳出しました。これも、特定の病気と結びつけることができないという判断によるものであり、暫定的なものとしてされています。そして、同聖書の「あとがき」にもあるように、「適切な解釈」が求められることとなります。

古い聖書を使用している場合、「らい病」と記されている部分を、「これは今日のハンセン病」と読み替えるのは誤りです。「らい」という言葉は差別的に用いられてきたため、今日この病を「ハンセン病」と呼ぶのが一般的です。教会でも、差別的な言葉であれば用いない方がよいと判断し、聖書の「らい病」を「ハンセン病」と読み替えてきました。しかし、何の病か分からないものを「ハンセン病」と読み替えることは、何の配慮にもなっていませんし、むしろ不適當です。

これは古い版の口語訳聖書と、初期の新共同訳の新約聖書、古い版の新改訳聖書に当てはまります。教会に備え付けの聖書が古い版の場合も、適切に対応しなければなりません。

改訂された口語訳と新共同訳では、これらの言葉は「重い皮膚病」、新改訳改訂第三版では「ツァーラアト」になっていますが、これらの聖書を使用する場合も、「重い皮膚病」や「ツァーラアト」を「ハンセン病」と読み替えることは誤りですし、そのように説明してもいけません。

内容について

聖書の時代の「重い皮膚病」に冒された人の社会的立場を説明する場合、それを今日のハンセン病と関係付けるのは正しくありません。例えば、レビ記 13 章に記されているように、この病は《汚れ》とされたことや、自らを《汚れた者、汚れた者》と呼ばわらなければならなかったことなど、「重い皮膚病」に冒された人が、社会的に過酷な立場に置かれたことは確かです。しかし、それを今日のハンセン病と結び付ける根拠はなく、ただハンセン病に対する偏見を助長することになります。

さらに、この前提に立って、聖書の「らい病」は今日では既に怖い病気ではないと説明することも、適切ではありません。これはハンセン病に対する「配慮」に基づく説明なのですが、繰り返しますが聖書の「らい病」はハンセン病ではないのですから、この「配慮」は逆にハンセン病に対する誤解を生じさせます。ハンセン病に対する配慮は、正しくなされるべきです。

また、「らい病」に関する聖書の物語には差別の意図はないので、「らい病」という言葉を使用しても構わないという考えもありますが、不適當です。特に新約聖書の場合、主イエスは「重い皮膚病」に冒された人々を、分け隔てることなくお癒しになりましたから、主イエスにこの病に対する差別の意図がないことは明らかです。しかし私たちがそのメッセージを語る場合、今日の日本社会に対して語るのですから、「らい病」という言葉を使用することは、宣教の言葉として不適當です。

そもそも、聖書のメッセージそのものに差別の意図がなくても、聖書を語る者には、差別意識は宿ります。自分には差別意識がないと思うこと、また自分の差別意識を問おうとしないことは、自己義認にもつながりますし、それに気づかないことが、「らい病」と信仰をめぐる教会の不幸な歴史の原因とも言えます。自分には差別意識がないと思う者にも差別意識は宿ることを、私たちは歴史から学び、自らの言葉を吟味する必要があります。

(日本ホーリネス教団 福音による和解委員会 HP より)

1:41 イエスが深く憐れんで（怒って）、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい（わたしは望む）。清くなれ」と言われると、



聖書には原本（オリジナル）が存在しておらず、手書きの写本が何種類も存在しています。さらにそれぞれの写本には細かいところで違いがあり、どれがオリジナルなのかを判断するのは大変なことです。

この1章41節は、マルコ福音書の中でも一番判断が難しいとされるところです。新共同訳聖書で「深く憐れんで」と訳されている語は「スプラクニステイス」ですが、この語が「オルギステイス」（怒って）と書かれている写本が特に西方で多く存在するのです。

「深く憐れむ」と「怒る」、どう考えても間違えそうにない語です。ギリシア語の綴りもまったく違います。ということは、写本をする人があえて書き換えたと考えられるのです。

ここからは想像です。写本家が、「イエス様は深く憐れむ方なんかではない。ここは怒っていたのではないか」と考えるのと、「イエス様は怒る方ではない。深く憐れまれたのではないか」と考えるのと、どちらが自然でしょうか。わたしは後者ではないかと思います。

ということは、もともとの福音書は「怒って」となっていたのではないか、そのように推測することができます。事実、多くの神学者は「怒って」が本来の形だったとします。

では、「怒って」というのであれば、イエス様は何に対して怒っていたのでしょうか。「さあ、宣教だ！」と意気込んだ矢先に邪魔をされたからでしょうか。それはなさそうです。

それとも、悪の力、つまり神さまに反抗する力に対する敵意からでしょうか。それは多少あるかもしれません。

わたしは、イエス様は、彼が人々から見捨てられていたことに対して怒っていたのだと思います。神さまの憐みは本来、すべての人に対して及ぶべきものでした。しかし律法によって、宗教によって、さらに律法を守る人によって、彼らツァーラアトに冒された人たちは排除され、差別されたのです。そのことに対する怒りなのではないでしょうか。神殿の境内で「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」と怒られたイエス様を想起させられます。本当の愛を伝えたい、その思いを感じずにはられません。

イエス様は手を差し伸べてその人に触れました。祭儀的に「汚れた」人に触れると、その人も汚れると律法は記します。しかしイエス様はあえて、その人に触れます。イエス様は自らを汚れの中に入れ、彼と同じところに立ち、同じ目線から手を触れて「清くなれ」と命じられるのです。

ツァーラアトに冒された人が望んでほしいこと、それをそのままイエス様は望まれました。

1:42 ~~たちまち~~（そしてすぐに）重い皮膚病（ツァーラアト）は去り、その人は清~~くなった~~（められた）。

前回のシモンのしゅうとめの熱と同じように、ツァーラアトも擬人化されて描かれます。この時代、病は何か悪いものが体内に入ったためだと考えられていました。「痛い痛い、飛んで行け」も同じようなことなのかもしれません。

1:43 イエスは（きつく戒め）すぐにその人を立ち去らせようとし、（追い出した。）~~厳しく注意して、~~

新共同訳で「立ち去らせる」は「追い出す」、「放り出す」という意味で、「厳しく注意して」は、鼻をならして言うというニュアンスのかなりきつい表現です。この前の大河ドラマで、黒田官兵衛が吉川元春に対して息を荒げ、唾を飛ばしながら出陣を迫る場面が描かれていました。そのように、言葉と共にきつく息を吐きながら、イエス様は戒めたのです。

1:44 （そして彼に）~~言われた~~（う）。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体（自分）を見せ、モーセが定めたものを（自分の）清めのために献げて、人々に証明（証し）しなさい。」

イエス様が強く命じたこと、それは「だれにも、何も話さない」ことでした。沈黙を守るようにというこの命令がなければ、奇跡を求めてイエス様の元にはたくさんの人々が集まることでしょう。しかしそれは、イエス様にとっては福音宣教の妨げとなるのかもしれません。また読み方によっては、祭司に会うまでは他の人とは接触してはならないという律法を遵守させようとしたただけだともとることができます。

祭司に自分の体を見せ、献げ物をするようにとイエス様は促します。つまり律法をきちんと守りなさいと言うのです。それはイエス様が律法は決して犯してはならないと思っていたからでしょうか。それもあるでしょうが、それだけではないと思います。

少し大げさな言い方かもしれませんが、その当時の人々にとって、ツァーラアトに冒されることは、社会から抹殺されることを意味していました。人と会うことを禁じられ、住み慣れた場所から追い出される。「汚れた者」というレッテルを貼られ、身を隠して生きていくしかない。

その彼の状態を知っていたイエス様は、身体的にやすだけではなく、社会的に回復し、元の生活に復帰することにも関心を持たれていたのです。

1:45 しかし、彼はそこを立ち去ると（出て行って）、大いにこの出来事を人々に告げ（宣べ伝え）、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない（人里離れた）所におられた。それでも、人々は四方（至る所）からイエスのところに集まって来た。

イエス様の命令を無視し、ツァーラアトから清められた男はイエス様のことを周りに告げます。この「告げる」という言葉は、「宣教する」という語と同じです。

また、「出来事」と訳された言葉は「ロゴス」、ヨハネ福音書の最初の部分、「はじめに言葉があった」の「言葉」と同じ語です。彼が伝えた出来事とは、イエス様の言葉を含む、イエス様ご自身のことなのです。

イエス様に出会うまで、社会から疎外されていた者が、イエス様の福音のみ業を宣べ伝える。これが本当の福音宣教のあり方なのではないでしょうか。



その行為は確かに、イエス様の命令に反するものでした。しかし彼は語らずにはおられなかった。その喜びを人々に告げずにはおられなかったのです。人がイエス様の福音に出会ったならば、その福音を他の人に告げることが、何ものも妨げることとはできないのです。

イエス様はツァーラアトに冒された人をいやしました。それは単に病気の人をよくするということだけではありませんでした。このみ業によって、ユダヤ人社会の内側にいる人々と外にいる人々との壁を取り除きます。周辺に追いやられた人々の中に立って、その人たちも神さまから同じように愛されていることを、身をもって伝えていかれました。

そしてイエス様は「人のいない所」へと行かれます。この語は「荒れ野」や「人里離れた所」と訳されたのと同じ語です。洗礼者ヨハネが悔い改めよと叫び、イエス様が誘惑を受けられ、また祈るために行かれた場所。公然と町に入ることができなくなったイエス様は、その場所へと行かれます。後に 5000 人の供食がおこなわれたその場所は、神さまとイエス様が対話されるところ、神さまの力があふれているところ、神の国の先取りとして描かれているように感じます。その場所に、人々は何を求めて集まってくるのでしょうか。

今回の学びは、これで終わります。次回は 9 月 25 日(木)10 時 30 分～で、「中風の人をいやす（マルコ 2：1～12）」について学んでいきたいと思えます。